

「東北グローバル考古学—宮城の先史を再発見—」①

## 比較考古学の地平

阿子島 香

はじめに

今年度の館長講座は、ふるさと東北の遺跡を取り上げながら、世界各地のさまざまな文化と比較し、人類史の中での意義を探っていきます。全8回は次のような内容で進めていきます。「比較考古学の地平」「ハンドアックスの東と西」「ホモ・サピエンス東北へ」「氷河時代のハンターたち」「美術と思想の起源」「石器製作のハイテク」「地球温暖化の中で」「『縄文』への道」。どうぞよろしく、お付き合いください。

人類学としての考古学

世界を見渡しますと、考古学には「お国柄」というものが、確かにあります。文化財保護と一体となった国民的な支持の下に、歴史学の一分野として高い水準の研究が確立している日本、伝統的に地質学（特に第四紀地質学）との連携が強固なフランス、そして比較文化研究を重視して、広義の文化人類学の一分野として研究が進められているアメリカ、などです。

考古学は、遺跡・遺構・遺物の研究に基づいて、人類の過去を復元していきます。そこには、実証的な手続きに従って進められるという前提がありますから、研究者の主観が入る余地はあまりないように思われます。しかしながら、すべての考古学資料は現在の世界に属していて、そして静止した状態として存在します。考古学的記録（モノである考古資料）から、当時の生活（起きたコト）に迫る研究の中で、①「現在から過去へ」、②「静態から動態へ」、という二つの次元の推論の過程には、いまでも未解決である課題が多く残されているとの、鋭い指摘を展開したアメリカの考古学者がいました。「プロセス考古学」の創始者として学史的評価が定まっているルイス・ビンフォード（2011年4月逝去）です。

ビンフォードは、もともと理系の学生で生物学、動物学を学んだ背景がありました。その後、考古学に転じて、アメリカのみならず、世界の考古学に大きな足跡を残すことになりました。人類学的な関心には、アメリカ軍の駐留兵として日本語の訓練を受け、戦後の沖縄で過ごした経験が大きかったとの回想があります。

アメリカに戻って考古学を学び、ミシガン大学大学院に進学して、当時の新しい学派であったレスリー・ホワイトなどの「新進化主義人類学」に親しく触れたわけです。そして学史上にも有名な論文「人類学としての考古学」を発表した1962年からは、土器型式学、文化系統論など、当時のアメリカ考古学界で主流であった研究を厳しく批判して、「ニュー

一・アーケオロジー」運動の中心になりました。ビンフォードは、考古学の姿を一変させたという歴史的評価がなされています。

### ミドルレンジセオリー

ビンフォードは、考古学の実証性を確実にしていく方法として、「ミドルレンジセオリー」を提唱しました。そもそも遺跡や考古資料がどのようにして形成され、文化層が残されていくかを追求するためには、人間集団が生活していた状況と、その結果として残された考古学遺跡の両方が得られる分野を、着実に研究すべきだということです。具体的な研究方法として、三つの分野を提唱しました。現代の考古学者が、先史・古代人のように、実際にさまざまな作業を行なっていく「実験考古学」、伝統的な生活様式を続けている人々の中に住み込んで、生活様式やさまざまな行動と遺跡（現在の形跡）とを対照させる「民族考古学」、そして過去の同時代の人々によって書き残された記録類を、遺跡の内容と対照させて考察していく「歴史考古学」が、考古学におけるミドルレンジセオリー（中範囲の理論）に含まれるとしたのです。

講座では、実験考古学分野の実例として、使用痕分析の基本的な方法をご紹介します。遺跡から出土した石器の顕微鏡観察で検出される、微小剥離痕、線状痕、摩耗光沢面のそれぞれを、多くの使用実験による標準パターンと参照することで、各石器の機能を判定していく手法です。東北大学使用痕研究チームとして、私も長年、取り組んできた方法です。

プロセス考古学は、世界各地のさまざまな文化を比較して、それらの間に存在する「法則性」を解明しようとしています。遠く離れた地域の間認められる驚くべき類似性、それらは繰り返し現れて、現代人に衝撃を与えるのです。いかに、なぜ、人類は同じような行動を行ない、そして生存を確実にして、何万年という時間を生き抜いてくることができたのでしょうか。

### 石刃と細石刃

後期旧石器時代の事例を取り上げて見ましょう。寒冷な氷河時代に、人々は多くの地域で「石刃」（せきじん、Blade）という道具を使用しました。石刃は薄くて長く、両方の側面は鋭い刃部を形成します。あらかじめ形を整えた石塊（石刃石核）から、多数が連続して剥離されます。宮城県でも多くの石刃石器が出土しています。石刃は、そのままでも使用されますが、また各種の道具に加工されていきました。たとえば丈夫な刃部を持つ「彫刻刀形石器」（彫器）、丸い形の刃部で皮革の加工に最適な「エンド・スクレイパー」（搔器）、持ちやすいように一方の縁辺を調整加工した「ナイフ形石器」などがあります。そして、石刃石器は、世界各地で寒冷な時期に、繰り返し出現しました。それらの先史文化では、人々は広大な地域を頻繁に移動して、大型動物の狩猟中心の生活を送っていた場合が多いのです。

また、後期旧石器時代の終わりごろには、非常に小さな石刃タイプの石器である「細石

刃」(ヨーロッパでは「小石刃」と呼びます)が、盛んに製作されました。細石刃は、骨角や木製の軸にはめ込まれて固定され、槍を投げる道具である「投槍器」によって投射され、鋭い武器として人々の生活を支えました。また、それらの石器を製作する方法(「石器製作技術」)にも、多くの類似したパターンがあります。

ユーラシア大陸の広大な地域で、同様な文化現象が繰り返し現れるのはなぜなのでしょう。一方で、地域によって非常に異なった様相を示す文化現象も数多くあります。比較考古学は、さまざまな文化を相互に対照させて、類似と相異を「なぜ」「いかに」と考察し、究極的には文化の過程(プロセス)の法則的な「説明」に至ることを目標としてきました。このような理論的立場から、世界的に「プロセス考古学」とも呼称されているのです。

講座では、フランス南部の後期旧石器時代後半の遺跡、マドレーヌ文化に属するドゥフォール岩陰の発掘状況と出土石器をご紹介して、石刃と小石刃の実際を考えます。また、比較のために日本列島の東北部の石器と対照させてみます。新潟県荒屋遺跡です。1988年、1989年と、芹澤長介先生のもと、東北大学考古学研究室が発掘調査し、多数の「荒屋型彫刻刀」を出土した細石刃文化の代表的な遺跡です。

#### 北米の尖頭器文化

北米では氷河時代が終末を迎える1万数千年前に、急激な人類の拡散が起きました。北米大陸最古の住人については、今なお諸説がありますが、最初に適応に成功し拡散した文化は、パレオインディアン文化といいます。地球温暖化の進行とともに、北米大陸北半を覆っていた二つの氷床の間に、細長い回廊上の土地が開けました。「氷無き回廊」と呼ばれます。現在のカナダ西部になる、そこを抜けて、米国西部の大平原地域(ザ・グレートプレーンズ)に至ると、マンモスやバイソンなどの大形動物に満ちた大地が広がっていました。また近年では、人類は西海岸の海伝いルートでも移動したとの学説もあります。

パレオインディアン文化は、精巧に製作された石槍を携えていました。クロービス型、フォルサム型などがあります。ご紹介する遺跡は、モンタナ州のミルアイアン遺跡で、野牛狩猟民によって残された、骨が累々と堆積した文化層と出土石器です。

#### 形の相異と構造の類似

細石刃文化(東北日本)と小石刃文化(フランス)、尖頭器文化(北米)の3地域を比較すると、前二者に対する尖頭器の特色が際立って見えます。しかし、同じ頃に生じた3文化の構造という面に着目すると、見かけ上の相異にかかわらず、石器製作の「技術組織」(ビンフォードの用語ですが、別の機会に詳述したいと思います)の面では、かなりの類似性が認められます。それは、次のような点に表れています。

- 1) 狩猟の武器として、着装細石刃と着柄尖頭器は、双方ともに石器製作技術体系のなかで、特化した位置にあります。
- 2) 投槍器によって、獲物に投射されます。大形動物が主要な標的となりました。使用痕

分析からも、3文化間の類似が認められます。

- 3) 特定の石器の種類に対して、石材を選択します。石器製作に最適な石の種類があり、しばしば遠隔地から搬入されます。スクレイパーなど日常的な多くの石器には、在地石材（遺跡の近辺で採集される材料）が使用されます。
- 4) 狩猟具（武器）となる石器の製作には、特別の高度な技量が必要とされます。石器製作技術の粋ともいえます。
- 5) 構造の類似（いわば、見かけ上の相異を超えた共通性）の背景には、共通の時代的要因があったと考えられます。年代（氷河時代の終末へ）、生活様式（高い移動性）、生業経済（大形動物狩猟文化）、などがあげられるでしょう。

このような、形の違いと仕組みの類似は、いわば文化の「相似」現象として、とらえていくことができるでしょう。比較文化の観点では、構造に着目しなければなりません。

人類が経験してきた長大な年月には、進化の道筋がありました。進化とは、身体の変化すなわち生物としてのヒトがたどった道筋、19世紀のダーウィン以来の進化論でとらえる生物進化に限りません。人類は「文化」という、もう一つの次元の行動を発達させて、環境に適応し生存してきました。そのような文化にも「進化」という考え方を適用して、人類史を考察する学派もありました。それがアメリカの「新進化主義人類学派」です。一方で、日本歴史学には、「発展段階論」と言われる理論もあって、深く研究が蓄積されてきたわけですが、両者の理論的な考え方には、共通性も認められます。文化が長期的に変化していくに際して、どのようなメカニズムが働いていたか、また歴史的発展を規定する要素は、どのような構造で相互関連していたか、異なる地域相互の間に、共通の道筋いわば発展の法則はあるか、それらは、どのように実証的に資料から検証できるか、などといった諸問題です。

繰り返しのまとめになりますが、アメリカのプロセス考古学とは、そのような文化の類似と相異について、比較研究という方法で、いかに、なぜ、と説明していくことを目標とします。考古資料自体のパターンの比較（静態）から、当時の生活を復元した姿どうしの比較（動態）へと進むので、その研究過程では、「ミドルレンジセオリー」が重視されることとなります。

おわりに

本講座8回の各テーマとして、「比較考古学」という観点からも、グローバルな意義を持つ題材を選んでみました。宮城県を中心にして東北地方の先史時代の遺跡を紹介し、それらの内容が、同時代あるいは同様な文化段階や生活様式の、世界各地の遺跡と比較した場合に、どのように類似や相異が認められるか、それはどのように理解できるかについて、当館長の独自の視点を含めて、探っていきたいと思います。「プロセス考古学」は、それらの遺跡がどこに所在するのかわけず、人類の歴史の流れや法則性という脈絡で見ていくという考え方を取ります。いわば外からの視点で、相互に比較されていく一つの対象と

して、ふるさとの遺跡を位置づけることにもなり得ます。しかし、このことは、決して郷土の遺跡の価値を軽く見るということではありません。逆に、私たちが大切に守り伝えてきた文化遺産が、いったいどのような、「人類にとっての普遍的価値」を有するのか、より深く理解することにつながっていくものでしょう。

#### 参考文献

阿子島香 (2020) 「ミドルレンジセオリーと日本考古学」『歴史』第 134 輯 所収。東北史学会。

阿子島香・溝口孝司監修 (2018) 『ムカシのミライープロセス考古学とポストプロセス考古学の対話ー』。勁草書房。